

礼拝：2021年8月8日（日） 聖霊降臨節第12主日

交読：詩編57編1～6節

聖書：イザヤ書40章9～11節

マタイによる福音書10章16～25節

説教：「狼の中で生きる羊」 佃 雅之

キリストは12弟子たちを派遣するにあたって、彼らに“はなむけ”の言葉を語っています。今日の箇所を示されたキリストの言葉は、12弟子たちにだけ特別に語られたものではありません。キリストを信じて生きるすべての者に、語り告げられている言葉です。私たちは他の誰でもなく、キリストによって招かれ、キリストの言葉を聞いて、その言葉に答えて、この世界に出て行くのです。キリストが「わたしはあなたがたを遣わす」と語ってくださいます。私たちはキリストの祝福を受けて、伝道するという使命を与えられて、この世界に遣わされて行くのです。けれども私たちが送り出されるのは、実に厳しい世界だとキリストは語ります。「あなたがたは、鞭打たれる」「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう」「あなたがたはすべての人に憎まれる」今日の箇所の言葉に、私たちが理想や希望を見いだすことは極めて難しいことでしょう。しかし、キリストの言葉は、私たちが暮らす社会の現実です。世界の各地で、争いも続いています。私たちの身近にも、信じられないような事件が起こっています。ウイルスの脅威は、未だ収束の兆しはありません。今、私たちの生きている世界は、理想とか希望ということが、飲み込まれるような社会ではないでしょうか。キリストは、私たちに「人々を警戒しなさい」と警告します。この世界は、狼の群れが思うままに行動しているような世界だからです。

キリストの弟子たちは、この世の狼の群れに比べたら羊だと言われます。羊は狼に食い殺されてしまわないように、警戒しなければなりません。しかし、警戒すべきものは、人々だけ、この世のことだけではないでしょう。キリストは山上の説教で、狼の群れは、教会の外だけにいるとは限らないとも語っていました。「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとうてあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。」私たちにあっては、この世界は、教会の内にも外にも存在します。あらゆるところに、狼はいるのです。それどころか、私たち一人ひとりも、この世に飲み込まれ、狼に変わってしまうかもしれません。そのためにも、人々を警戒する必要があります。

キリストは弟子たちについて「狼の群れに羊を送り込むようなものだ」と語りました。確かに弟子たちは羊です。無力な羊です。キリストは、無力な羊が生き抜くためには「蛇のような賢さと鳩のような素直さ」が必要だと語ります。キリストの言われる「鳩のような素直さ」とは何でしょう。ここで「素直さ」と訳される言葉を、パウロはフィリピの信徒への手紙2章15節で「清さ」と言っています。14節から続けて読んでみます。「何事も、不平や理屈を言わずに行かないなさい。そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、

よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかりと保つてでしょう。」この「清い者」が、鳩のような素直な者です。パウロの言う「清さ」は、その前の言葉13節から生まれています。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行なわせておられるのは神であるからです。」私たちが主を信じる、信じて生きようとするその時、私たちの内に、主が共にいてくださるのです。主が働いてくださるのです。私たちが生かし、私たちを用い、私たちに御業を行なわせてくださるのは神だと信じるなら、何事も、不平や理屈を言わず、終わりの日まで耐え忍ぶことができます。私の心、私の思い、私の考えで生きるではありません。何をすることも御心が私たちの内に働くのです。鳩のような素直さとは、「私心」のなさだと語った人もいます。主に従順であろうとすることです。鳩のような素直さは、飼い主に従う羊の従順さです。では、狼の群れにも負けない「蛇のような賢さ」とは何でしょう。「賢さ」ということについて、今日の福音書の著者マタイは、キリストが忠実で賢い僕のことについて語ったことを伝えています。24章45節以下です。「主人がその家の用人たちの上に立てて、時間どおり彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕は、いったい誰であろうか。」ここで語られている「忠実」とは、信仰のことです。信仰と賢さが結び付いた、一人の僕の例をキリストは挙げています。キリストは語ります。「主人が帰って来たとき、言われた通りにしているのを見られる僕は幸いである。」忠実で賢い僕とは、どんな時も主人の言われた通りにしている僕のことです。いつでも、主人に従順にしているのですから、裏表がありません。一心に、御心に聞き従おうとする人が賢いということ。御心に生きようとする、そこに賢さが与えられるのです。「蛇のように賢く」は、人を出し抜くような、狡賢さや器用さにも思えます。狼の群れの中で生きるのですから、しかも、無力な羊がその中で生き抜かなければならないのですから、狡賢くないとやっていけないかのようにも思ってしまう。しかし、キリストは私たちが狡賢く立ち回るようなことが苦手であることをご存じです。鳩のような素直さ、蛇のような賢さが結び付いた生き方があります。それは一見、正反對のもののように思えますが、主に従順であることに同じです。主に従って生きることによって与えられる、あるいはそのことによって生み出される蛇のように賢く、鳩のように素直になる生き方があるということ。いずれにしても私たちは、この世の力で勝負するものではありません。お金や自分の知恵で勝負するのでもありません。弟子は信仰で、それはつまりキリストへの素直さ、主の教えに聞き従うという賢さで勝負するのです。キリストは「一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げなさい」と語っています。信仰者であるからといって、迫害に対して殉教することが、唯一の道ではないということ。慎重な態度で、無用な摩擦や消耗を避け、与えられた使命を、その責任を全うすることが大切であるからです。そのために、「どこで逃げるか」、「どこへ逃げるか」。その見極めには蛇のような賢さが必要です。分別と冷静さが必要です。逃れの道、困難の出口を、主は必ず用意してくださると信じるのが私たちに求められていることです。

今日の箇所、キリストは弟子たちに向けて「引き渡される」という言葉を繰り返します。17節「あなたがたは地方法院に引き渡され」、19節「引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない」、21節「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり」この「追いやり」は「引き渡される」と同じギリシア語が使われています。「引き渡される」という言葉は、弟子たちの運命について言い表す言葉だけではなく、キリストの運命、つまり、十字架の死にいたるキリストの生涯をまとめて言い表す言葉です。12弟子たちだけ呼び寄せて、キリストが自らの運命について語る場面があります。20章18節以下です。

「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する。」十字架に磔になる、生涯の最後を言い表す言葉として、「引き渡される」という言葉が二度使われています。キリストに従って生きようとする弟子たちは、実は、キリストとその生き方において一つと結びつけられるということです。キリストがそうであったように、弟子たちはキリストに従ってキリストのように生き、キリストのように死に、そして復活させられるのです。

主キリストは私たちの無力さを、深く憐れんでくださる方です。「引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。」というキリストの言葉は、私たちが苦難に遭ってもキリストと同じ道をたどるなら、キリストと共に苦しんでくださるという約束の言葉です。私たちが苦難に立たされているということは、神の国の最前線に今、自分が立っていることしるしであるからです。

キリストこそ神の小羊です。会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いを癒されました。権威ある方として語り、御業を行ないました。そのキリストのあり方、生き方に多くの人たちは驚かされました。しかし、徹底的に弟子たちを、人々を、そして私たちを打ちのめしたのは、キリストご自身が神の小羊として、まことに従順に引き渡され、十字架の死にいらしめられたことです。御心のままに、その苦難を引き受けられたことです。弱さに徹した、無力さに徹した。ただ自らの苦難を引き受けることで、傷つくことで、死ぬことで、狼の群れの中で生きる弱り果て打ちひしがれている羊のような私たちと同じ場所に立ち、苦難を共にしてくださいました。その主キリストが、今日も私たちと共に生きてくださっています。

「はっきり言っておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらない内に、人の子は来る」とキリストは語りました。「人の子は来る」それは必ず「救いはある」ということです。今日与えられたもう一つの御言葉と重なります。預言者イザヤは、「良い知らせ」つまり福音を伝える者に「見よ」と語りかけ、救い主の到来が近いことを伝えています。そして11節で、来られる方は主なる神と等しく、羊飼いと群れを養ってくださると約束されています。群れを養う羊飼いは、特に弱い子羊

や乳を飲ませている母羊に対してやさしい配慮をされています。イザヤは「それがあなたがたの神だ」というのです。神は単に力強だけでなく、もう一面は、弱い命に対して優しさを示す方であるからです。私たちの先行きにも「よき牧者」キリストが居てくださいます。その方はすでに来られ、私たちは、いつも抱かれています。私たちが羊として、羊のままに、わが牧者に信頼して任せて、心配も思い煩いも何もかもすべて委ねて、無力なままで、キリストの弟子として生きることができます。何と私たちは幸いな弟子でありましょう。

「弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。」このキリストの言葉を「弟子たちは師のごとくあれ」とまとめた牧師がいます。私たちに目標とする師、私たちの模範となる先生がいるのです。私たちの手本となる方がいてくださる。憧れる師がいる。その方こそ主イエス・キリストです。ここでキリストが「弟子たちは師のごとくあれ」と語る時の「師のごとく」というのは、一つのはっきりした視点から語られています。私たちの人生は、確かに色々な困難があります。その中でも、私たちは主イエス・キリストを信じて生きる、先生であるキリストに従って生きることによって伴う苦難がある。キリストが十字架の死にいたるまでの生涯、様々な苦難を引き受けられたように、私たちがキリスト者として負うべき苦難がある。その視点から「弟子たちは師のごとくあれ」とキリストは語っています。パウロなら「キリストと共に苦しむ」という言い方となります。ただし、苦しむことが目的ではありません。信じて生きて、キリストに従って、「キリストと共に苦しむなら、共にその栄光を受ける」とパウロは語ります。

「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と語ってくださったキリストの言葉に希望を持ち、神の僕、キリストの弟子として生きる喜びと感謝を味わう生き方、それが「弟子たちは師のごとくあれ」という生き方です。困難な時こそ、私たちの中でキリストが大きくなってくださいます。キリストの言葉に従う、御心に従順になる、主の言われた通りに生きようとする。これが「狼の中で生きる羊」つまり私たちの生き方です。

祈りましょう。

聖なる神。キリストがあなたの小羊として生きられたことの恵みのゆえに、私たちは招かれ、キリストの弟子としていただき、主の恵みを証しするために、この世界に遣わされていることを感謝します。困難の多い、苦しみや悲しみを感ずる使命でもあります。しかし、あなたに守られ、あなたが導いてくださり、多くの人と出会わせていただき、感謝と喜びに満ちた務めでもあります。どうか、私たちがキリストの弟子として、ただ御心を第一に生きることができるよう、聖霊が導いてください。力を与えてください。今、礼拝を献げているそれぞれの場所に主が来てくださいますように。主の御名によって祈ります。アーメン。

讚美：讚美歌459 献金 主の祈り 黙禱